



Between Economy and Love: Surrogacy Narratives in the USA.

経済と愛情の間:米国における代理出産のナラティブ

Interviewee
Prof. Heather Jacobson

Q. 専門や関心分野を教えてください。

社会学、家族社会学が専門で、生殖分野について研究してきた。ブランダイス大学で社会学の博士号を取得した。主に、現代米国における社会的不平等と家族形成の相互作用について、様々な形で研究してきた。特に新しい方法による家族形成に関心を持っている。

最初に出版した本 (Culture Keeping) では、国際養子にフォーカスした。特に、中国やロシアから養子をとった米国の母親が子どもの母国の文化をどのように理解しようとするかに関心がある。子どもを養子縁組した経験について、養親にインタビューを行った。

二番目の本 (Labor and Love) では、他人が親になるのを助ける人々にフォーカスした。最初の本を書くためにインタビューした養親は、最初、ART を使って家族を作ろうと考えていた。そのことが、代理出産に興味を持ったきっかけだった。

Q. 代理出産に関する研究について教えてください。

質的研究の手法を用いている。ほとんどがインタビューに基づいており、内容分析も使う場合もある。

代理出産についての研究の集大成は Labor of Love で、代理母、依頼者、代理出産に関わる専門家、ドクター、法律

家、エージェントなどに対し、深いインタビュー (in-depth interview) を実施し、それに基づいて執筆した。代理母の配偶者、代理母の子ども、その他の家族メンバーにもインタビューをした。

代理母が行なっている労働量の多さに驚かされた。代理母たちに、プロセスに費やした仕事の量について聞いたため、彼女たちは仕事のレンズを通してそれを見るようになった。代理母たちは自分の骨折りが認められることを望んでいたが、それを仕事と枠付けられることを望んでいなかった。それは興味深い矛盾だった。代理出産を仕事と考えることへの抵抗は、それが、主に代理母になる女性たちを非難するのに利用されてきたから。

自分は「曖昧な労働 (“obscured labor”）」という言葉を使ってそれを概念化した。代理母が行なっている労働は、代理母ビジネスによって曖昧化されており、依頼者やその他の専門家たちは、労働市場から子どもという概念を追放している。それは、代理母自身によっても曖昧化されている。代理出産は、家族がマーケットの一部になっているのではないかという文化的不安を喚起するため、アメリカ文化の中で居心地が悪い場所になっている。

もう一つの興味深い研究結果は、代理母が感じている罪悪感だ。私が話を聞いた代理母たちは、妊娠や出産を心から楽しみ、代理母になった満足感を感じていた。彼女たちは、主に自分のために代理母になっていた。そして、自分が代理母になるために家族のための時間や家族へのサポートが犠牲になっているということに罪悪感を感じていた。

米国では、出産は高度に医療化され、出産がトラウマになる人の割合は高く、その上、高額な費用がかかる。だから大勢の人たちにとって一部の女性たちが進



んで代理母になりたがるということを理解するのが難しい。代理母たちにとってもそれを説明するのは難しいことだ。

Q. 米国の代理出産は商業化されている一方で、利他性が強調され、自己犠牲が美化されていると思います。このような代理出産のナラティブはどのような背景から生じているのでしょうか？

代理出産は、生命の贈り物、自己犠牲であり、利他であるというナラティブが非常に支配的。それは文化とも結びついていて、なぜ女性はそれをやるのかということをも他人に説明する手段を提供している。多くの人々が、なぜ女性たちは代理母になりたいのかを理解するのに苦労している。特にそれらの人たちが自身では不妊を経験していない場合は、そのナラティブは、溢れている。多くのことを隠蔽してくれるから。それは、商業的マーケットであり、女性たちはお金を受け取っているという事実を隠すのに好都合だ。

利他的ナラティブは、代理母たちにとって、自分がなぜ代理出産に参加したかを他人に説明するのにも役立っている。もちろん、そこには一定の利他精神と自己犠牲があるのは間違いない。しかしそれは、代理母は自分のためにそれをやっているのだという事実を覆すほどではない。彼女たちは妊娠出産を楽しみ、その活動によって何がしかの収入を家族にもたらしている。しかしこのことを人に説明するのは難しい。

利他精神や自己犠牲ナラティブは、代理出産マーケティングの一部でもある。

Q. このようなナラティブの生成に、代理出産業界はどのように関与していますか？

このナラティブは代理出産を宣伝するエージェントによって使用されるマーケットフレーミングの特徴だ。さらに、代理母たちは、自分たちの仕事を理解するためのナラティブの一部としてそれを支持している。

多くの依頼者(特に異性カップル)は、代理出産を依頼する前に、家族を作るために大変な困難を経験してきた。非常に大きな苦痛、悲嘆を経験してきた、だから代理出産を依頼する頃には、代理出産が成功した場合、彼らは代理母に対してもものすごく感謝するようになっている。

依頼者は、“彼女は天使だ”“彼女がいなければ私たち家族は存在しない”というような言葉を使って感謝をあらわす。

これらの言葉によって、代理母は依頼者にとって非常に重要な存在だということがわかる。このことが、利他的ナラティブに貢献していて、代理母には後光が差しているかのようだ。もちろん、このフレーミングは2次的なものであり、必ずしも取り去らなければならないというものではない。

しかし、代理母も単なる人間。代理母と依頼者は、一定期間、親しくコミュニケーションをとる。それは、アップダウンがある関係だ。うまくいく関係もあれば、いかない関係もある。

Q. このような代理出産のナラティブは、今後、米国以外の国にも浸透していくのでしょうか？

米国は、いろんな意味で代理出産の中心地だ。代理出産の長く確固とした歴史がある。

事実上、成人であって十分なお金があれば、誰でも米国にきてエージェントを見つけてクリニックと契約し親になれる、唯一のオープンな市場だ。



体外受精、卵子や精子の提供、顕微授精などについても同じことが言える。エージェントやクリニックは、いわばマーケティングの手段として利他的ナラティブを用いている。

アメリカの代理出産業界が世界全体のマーケットに与える影響は大きい。国際養子縁組みのマーケットも開いたり閉じたりしているが、それと同じことが代理出産業界にも起こっている。

例えば、インドは、国際代理出産で活況を呈していたが、今は閉じた。米国以外のマーケットでも、アメリカ式の代理出産ナラティブの反響を聞くことができる。

それらの国のローカルなフレーミングによっては、アメリカ式と完全にマッチングしないこともあるが。

現在、ドイツの Dr.Anika Konig とインドの Dr.Anindita Majumdar らと比較研究を進めている。それぞれの社会のコンテキストにおける代理出産の枠組みを研究し、それらがどのように違うか、どのように似ているかを考察している。

Q. 今後、米国の代理出産はどのような方向に向かっていくと思いますか？

米国では、代理出産の規制、法律、法令などは州レベルで管理されている。連邦政府による規制や収支報告はない。代理出産が一般国民によってどのように受け入れられているか、そこにおける人々の経験を知る方法の一つは、州の規制をみることだ。

全ての州が文書を出しているわけではないが、そのようなものがある州では、代理出産に対してサポータティブだ。

しかし、いくつかの州の規制は、それほど影響力を持っていない。だから何か紛争があったら、それを解決するのに十分ではないということ。

生殖関連の法に関して、現在米国ではたくさんの方が起こっている。米国では、生殖法は文化戦争を引き起こしている。代理出産や ART は、そうしたより広い文脈での議論や葛藤の一つとなる可能性がある。だからこれからどうなるか、関心を持って見ていきたい。

Q. 米国の代理出産では関係性が重視されていますが、今後、代理母と関係を求めない外国人依頼者が増えた場合、その性格は変化するのでしょうか？

この分野の国際的なダイナミクスにまだ自分の研究の視野がおぼついていないが、アジアの顧客が増えている、その大部分が中国人だということは知っている。

エージェントやクリニックは新しいスキルが必要になっている(特に言語的な能力)。そして、実際に中国の地を踏んで、宣伝活動をし、顧客を獲得する必要ができてきている。

個人間の関係性に及ぼすインパクトは、複雑で多面的だと思う。外国人依頼者のために代理母になりたくない女性もいる。その理由は、そういう女性たちは、ローカルな依頼者からサポートが欲しいから。その逆に外国人依頼者のために喜んで代理母になる女性もいる。その理由は、他の国や文化について知ることができるから。

同様に、依頼者との個人的な関係に価値を置き、一緒に過ごしたいと考える代理母がいる一方で、そんなことはどちらでもいい女性もいる。

代理母に共通するようなプロフィールはない。私たちと同じように、人間は複雑な面を持っているから。

代理出産のエージェントやクリニックのゴールは、代理母と依頼者をうまくマッチングすること。そのために全員が同



じページにいるか、それぞれのニーズを満たすことができているかを確認する。もし、依頼者の多くが、関係を持つことに関心がない人たちであったなら、エージェントやクリニックの仕事は多くなる。関係を重視するのが今までのアメリカの代理出産の主要な特徴の一つだったから。

代理母になろうとする女性が、代理出産について調べたとき、このような性格を理解している。だから、もし何も交流できないと知れば失望するだろう。

代理母になった女性の多くは、自分のために代理母になること望む。自分が持っているスキルの一つとして妊娠を楽しむ。しかし、彼女たちは、妊娠出産を再び味わいたい、自分の子どもがこれ以上欲しいわけではない。だから、もしそのように妊娠を楽しむ女性に代理出産を依頼したい依頼者がいたとして、彼らが代理母と個人的な関係を持ちたくないとしたなら、それでもいいという女性はいるだろうと想像する。

依頼者と代理母の期待を一致させるのはエージェントの仕事だ。

Q. 依頼者にとって、代理母との交流は、規範化していますか？

米国では、それはかなりの程度規範化している。しかし、他のタイプの交流もある。

自分がインタビューをした中では、大部分の人が1回以上代理母になっており、または現在代理出産の最中だった。その中の一人は、5回の代理出産を経験し、それぞれの依頼者と異なった関係を持っていた。依頼者との関係性に濃淡があった。親しく関係している依頼者もいれば、そうではない依頼者もいた。代理出産のコンテキストが、ある一定レベル

の親密性を保証していたが、全部に当てはまるわけではない。

また、このような場合もある。依頼者から時々カードを受け取ったり、フェイスブックの友人になっている程度で、それ以上の関係はないというような。

ヨーロッパなどの国から来る外国人依頼者には、米国を選んだ理由を、(インドやタイ、ウクライナ、メキシコなど)より倫理的だからというようなことを言う人がいる。

この選択は、倫理のレトリックを使用したマーケティングを反映している。公的、私的領域では、搾取の問題が危惧されている。だから外国人依頼者は米国を選んだ理由を、代理母が強制されたり搾取されたりしている危険性が少ないからだと言っていることがある。

米国は、代理母と知り合いになれるチャンスがある国だと見なされている。

Q. 依頼者と代理母の交流は形式的なものでしょうか、それとも本当の親密さがありますか？

私がインタビューした依頼者や代理母たちは、代理出産のマッチングのプロセスで、まるでロマンティックな関係のパートナーを求めるときと同じように興奮したり、そわそわと感じていた。ちょうど、デート・サイトでロマンティックな相手を見つけるのと同じように。

交流のレベルは双方の人たちが何を望んでいるかによって左右される。きちんとした代理出産を提供している経験豊富なエージェントやクリニックでは、双方をマッチングするための方法をきちんと確立している。

代理出産業界は、マッチングに力を入れている。というのは、それが業界の持続にとって重要だから。マッチングが悪いと、依頼者にとってだけでなく、業界



全体にとって大きな問題を引き起こす可能性があるから。

私が代理母にインタビューしたのは、エージェントを通して。だからマッチングのプロセスは、オンライン・フォーラムで双方が直接に出会う場合とは異なる。

Q. 依頼者は、代理母との間にどのように境界を引いていますか？

これは、双方がどのようにマッチングされたかによる。クリニックと臨床家のためのガイドラインがアメリカ生殖医学会から出ているが、連邦政府の規制が欠けているので、実際に行われていることにはバリエーションがある。

きちんとしたサービスを長年提供しているエージェントでは、マッチングのプロセスにおいて、双方が関係性をどのように思い描いているかについて、会話をしたり情報を交換したりする機会が設けられる。そして、もしそうなったらどうするか、という考えられうるすべての可能性について議論する。だからそれが境界を明確にするのに役立つ。

例えば、もし、出生前診断で、胎児が生存可能ではないことがわかったり、出生後間もなく死亡するということがわかったりしたとき、どう感じるか？ 受精卵を何個移植するか？ 代理母が自分の子どものケアの費用と妊婦服が欲しいと言ったら？ 依頼者が代理母にはオーガニック食品だけを食べて欲しいと言ったら？ 依頼者が、医師の推奨の範囲を超えて、特定の行動様式を取らないよう代理母に要求したら？

これらの議論は、マッチング、契約、交渉の段階で生じる問題だから、潜在的な問題や誤解を解消しなければならない。早い段階でこうした議論を行っておくことがベスト。

時々、関係性に問題が生じることがある。仲介者として働くエージェントの場合は、そういう場合には、自分たちに連絡するよう求めている。双方にそれぞれコーディネータが付いていることもあるが、一人の人間が双方のコーディネーターを兼ねているエージェントもある。何れにしても、葛藤があればそれを解消するための努力が払われる。

Q. 同性カップルによって、生殖補助医療が盛んに利用されていますが、それは近代社会に特有の核家族を目指しているのでしょうか？

複雑な経験的問いなので答えることができない。米国で同性婚が合法化される前、ゲイコミュニティと家族を研究している人々が、同性婚がアメリカの家族に与えるインパクトについてしっかりとした議論をしていた。それは境界をずらして家族の概念を変えるのか、それとも伝統的な核家族の概念を強化するだけなのか？

米国の代理出産は、米国と世界中のゲイ男性に対してマーケティングをしている。

ゲイでパートナーがいる男性は、法的に親になるオプションがかなり限られている。特に、パートナーと一緒に家族を作りたいと考えている男性にとっては。体外受精が登場する前に子どもを持ったゲイ男性たちにはオルタナティブの手段があった。

今日、同性婚は米国で合法で、ゲイ男性に対する ART 産業によるしっかりとしたマーケティングが存在する。自分が内容分析を行った論文で、米国全土で ART の提供は地域格差があることがわかった。カリフォルニアでは豊富に提供されていたが、それ以外の場所ではそうではなかった。



アメリカの家族の変化についていうなら、代理出産は、ほとんどの ART クリニックでは小さな役割しか持っていないことを知るべきだ。つまり代理出産は彼らの業務の大部分を占めているわけではない。同性婚それ自体が、代理出産そのものよりも家族イデオロギーの変化に与える影響がはるかに大きい。この 15 年の間に劇的な変化があったが、同性婚の家族は、そういう巨視的なストーリーの一部だ。

Q. その他、コメント。

Labor of Love に登場する一人の代理母は、依頼者が日本人だった。日本人依頼者は、自分たちのプライバシーについてもすごく心配していた。自分たちが代理出産を依頼していることが他人に知られはしないかととても恐れていた。

ドイツとインドの研究者と共に現在、COVID-19 がそれぞれの国の代理出産業界にどのようなインパクトを与えたかについての比較研究を行なっている。そして、この 18 ヶ月間、依頼者や代理母がどのような経験をしてきたかについても。

受精卵の作製と廃棄の意思決定についての大きなプロジェクトの仕事もしている。子どもを作り終えた人が、余った受精卵をどうするかという意味決定について。

(2021 年 10 月)

@YURI HIBINO



Professor Heather Jacobson [Link](#)

テキサス大学アーリントン校の社会学教授。

研究分野は生殖補助医療、養子縁組、代理出産、生殖技術、胚の凍結保存および廃棄。

著書：

Heather Jacobson 2008 Culture Keeping: White Mothers, International Adoption, and the Negotiation of Family Difference. Vanderbilt University Press. [Link](#)

Heather Jacobson 2016 Labor of Love: Gestational Surrogacy and the Work of Making Babies. Rutgers University Press. [Link](#)

論文:

Heather Jacobson 2018 A limited market: the recruitment of gay men as surrogacy clients by the infertility industry in the USA. Reproductive Biomedicine & Society Online 7: 14-23.

Heather Jacobson 2019 Do Embryos have Kinship? Negotiating Meanings of Relatedness in the Fertility Clinic. Adoption & Culture 7 (2): 230-243.

Heather Jacobson 2020 Cross-border reproductive care in the USA: Who comes, why do they come, what do they purchase? Reproductive Biomedicine & Society Online 11: 42-47.

König, Anika, Heather Jacobson, and Anindita Majumdar 2020 'Pandemic Disruptions' in Surrogacy Arrangements in Germany, U.S.A., and India during Covid-19. Medical Anthropology Quarterly. August 11.

Heather Jacobson 2021 Commercial surrogacy in the age of intensive mothering. Current Sociology 69 (2):193-211.